國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

# 松下大三郎博士の日本語教科書：『漢譯日本口語文典』と『漢譯日語階梯』



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2023-02-06 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 鈴木, 一 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000905 |

# 松下大三郎博士の日本語教科書
## ―『漢譯日本口語文典』と『漢譯日語階梯』―

鈴木　一

「日本語文法研究書大成」の一冊として復刻刊行された松下大三郎著『漢訳日本口語文典』の編集解説（あとがき）で故徳田政信博士は、「本書の刊行で『漢訳日語階梯』のほか、松下説に関する主要著作のほとんどを、世に出すことができた。」と記しておられる。

松下文法学説の到達点を示す『改撰標準日本文法』（一九二八年・昭和三年刊）、『標準日本口語法』（一九三〇年・昭和五年刊）、『標準漢文法』（一九二七年・昭和二年刊）の完全復刻版を世に送り出して、松下文法の真価を広く知らしめたのは徳田政信先生である。まず『改撰標準日本文法』が一九七四年（昭和四九）に、つづいて増補校訂『標準日本口語法』が一九七七年（昭和五二）に、校訂解説『標準漢文法』が一九七八年（昭和五三）に、校訂『日本俗語文典』が一九八〇年（昭和五五）に、そして徳田先生の最後のお仕事として『漢訳日本口語文典』（一九〇七年・明治四〇年刊）の復刻が成ったのが二〇〇四年（平成一六）三月であった。これら諸書の復刻は、いずれも松下文典の最終版を底本にして復刻したもので、それぞれの巻末には徳田先生による厳密な解説が付されて、今日の松下文法研究者にとって、またひろく日本語文法研究のための貴重な基本図書となっていることはここに記すまでもない。

松下文法論の形成過程において『漢譯日本口語文典』（以下『漢訳日本口語文典』と表記する）が占める位置については、松下文法完成への「屈折点」であるとして、徳田先

生は次のように論じられる。

松下文法は、およそ三期の変化を経て完成する。第一期は、『日本俗語文典』（明治三四）に代表される。第二期は、中国人に対する日本語教育の実践から、内容の詳細化が進み、かつ分析的理論の徹底を求めて、要素論の方向に進んだ時期である。『漢訳日本口語文典』（明治四〇）の成立がそれで、屈折点に当たる。第三期は、標準文法三部作（大正末～昭和初年）の完成である。（『漢訳日本口語文典』・まえがき）

そして、「屈折点」ということについて「本書（『漢訳日本口語文典』）は、彼の初期の綜合的な文法体系（詞論・句論）のうち「句論」を放棄して、後の原辞を基底とする集合論的要素論に展開してゆく屈折点をなすところに、特色を見るのである。」（巻末の解説）と、『漢訳日本口語文典』の位置づけをされている。しかし〝「句論」を放棄して〟とする見方は、やや性急なのではないかと私には感じられる。むしろ本書『漢訳日本口語文典』の品詞論で説くところの「修正品詞」が、後の『標準日本文法』（『改撰標準日本文法』の前身）で展開される、原辞―念詞―連詞―断句論に発展していくのであって、本書が「屈折点」ではあっても「句論の放棄」までしたものとは言い切れないということをこの小論でたどってみたい。

## 一　『漢訳日本口語文典』の構成

言うまでもなく『漢訳日本口語文典』は中国人留学生のための日本語教科書であって、本文は2段組み、上段が日本語で下段に漢訳が対照されている。中国からの留学生のための日本語（口語）文典（すなわち日本語文法教科書）ではあるが、教科書・学習書的記述を超えた松下ならではの独創的解説が随所に記されている。

宏文学院教授松下大三郎著『漢訳日本口語文典』（誠之堂書房刊）の構成と、その主な記述内容を（　）内に整理すると以下のようになる。

総論　（日本（ニホン）の言語・口語と文語／章句／章句の成分である詞（コトバ）／章句は思想を表わす。）

第一章　詞之分類

（詞―単語―連語／和語・漢語・洋語／音（オン）と訓（クン）／詞（コトバ）を

七品詞に分ける―名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接続詞・感嘆詞／品詞の意味を助ける付属詞（フゾクシ）

第二章　助詞之意義

第一節　静助詞之意義（助詞の意味と用法）

第一類静助詞（主として格助詞を中心に）

第二類静助詞（主として接続助詞・終助詞）

第三類静助詞（主として副助詞を中心に）

第二節　動助詞之意義（助動詞の意味・用法）

第三章　詞之活用（動詞・形容詞・助動詞の活用）

第四章　頭尾語之意義

第五章　品詞之小分

第一節　名詞之小分

第二節　代名詞之小分

第三節　動詞之小分

第四節　准形容詞（副体詞）※今日の「連体詞」

第五節　関係副詞（後置詞）※「於いて」などの連語

第六章　詞之職任

主格／賓客／領格／中止格／独立格／独立格

本書は中国からの留学生に向けた日本語文典であって、松下博士は解説の大半を①「静助詞」（語として変化しない助辞、すなわち助詞）と「動助詞」（活用をする助辞、すなわち助動詞）の意味と用法、②「詞之活用（コトバ）」、すなわち動詞・形容詞の活用、および動詞形容詞の動助辞・静助辞への接続のしかた、③頭尾語（接頭語、接尾語、形式語ほか）などの解説に当てているが、それと並行して松下博士ならではの独創的な鋭い記述が随所にあって、思わずはっと感動させられる点が多い。それは後年の『標準日本文法』『改撰標準日本文法』、また『標準日本口語法』へと連続していくもので、松下博士は日本語文典（日本語教科書）のかたちをとって、その文法論の展開への出発点とされていたのである。徳田先生が、本書を松下文法完成への「屈折点」とされた評価は、このような観点から理解すべきであろう。

## 二　『漢訳日本口語文典』の独創性

松下『漢訳日本口語文典』で、特に注意して読み取るべ

き事柄を記してみると以下のようになるだろう。

1　章句（文）の成分を「詞」としている。
2　「修成品詞」論を提示した。
3　頭尾語の考察　―『標準日本文法』への前論
4　動詞の小分と動詞論―『標準日本文法』の前論
5　形式語の存在を示唆する。
6　「相の論」を提示―『標準日本文法』への前論

これらの視点から『漢訳日本口語文典』を精読していくと、本書が中国人留学生に日本語文典の精髄を説きつつ、『日本俗語文典』（明治三四年）から積み上げてきた日本語研究の成果をまとめ上げて、松下前期文法論を総括したものであることがわかる。「漢訳」を冠してはいるものの、本書に記される着想が軸となって、その論が更に練り上げられて十七年後の名著『標準日本文法』に結晶していくのである。以下に『漢訳日本口語文典』の特色について記したい。

## 1　章句の成分を「詞」としていること

本書の「総論」で、「章句」（松下は「文」を「章句」、後に「断句」と言って、「文」という呼称を用いようとしなかった）の成分を「詞」であるとして、それに松下博士が「コトバ」というルビを振っていることに、まず注目したい。

「**言語**（ゲンゴ）ハ、章句（シヨウク）ノ形デ思想ヲ表ハシマス。「**章句**トハ一ツノ完全シタ意味ヲ表ハス者（モノ）デス、一ツノ事ヲ述ベテ説明ヤ命令ヤ疑問ヤ感嘆ヲ表ハシマス。」

「章句ノ成文（セイブン）ヲ**詞**（コトバ）ト云ヒマス。」「言語ハ詞（コトバ）ヲ綴ッテ章句ヲ作ッテ其（ソレ）デ思想ヲ表はす者デス。」

（本書2～4頁）

「詞」にコトバというルビが示されていることは松下の言語観・文の構造観を理解する上で大きな意味を持つ。『標準日本文法』また『改撰標準日本文法』などの用語でもっとも多く用いられたのが「詞」である。両書ではルビを振っていないので、そのよみ方は一般的に「シ」であるとしている。また、「詞」の概念規定も明確になされているわけではない。松下のいう「詞」には二つの意味があり、①は今日いうところの「文節」に当たるものを指し、②は今日いうところの自立語を指している、というのが私の松下理解である。また、いわゆる「詞・辞」を対照的にとらえる

論での「詞（し）」と、松下文法でいう「詞」は少しくスタンスを異にするのではないかという私の理解は、本書で振られているルビ「章句ノ成分ヲ詞（コトバ）ト云ヒマス」によって、誤ってはいなかったように思う。

詞（コトバ）について松下は次のようにも言う。

「詞（コトバ）ハ言語ノ成分デ観念を表ハスモノデス。」

「詞ヲ分ケテ、名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、感嘆詞ノ七品（シナヒン）トシマス。此ノ七ツヲドレデモ品詞ト云ヒマス。」

「品詞ニハ単純ナノト下へ附属詞ノ付イテ居ルノト有リマス。併シ観念ヲ表ハス点ニ於テハ同ジデス。ソレダカラ同ジ様ニ品詞ト云ヒマス。附属詞は品詞デハナク、品詞へ付イテ其レト一緒にナッテ一ツノ品詞ニナルノデス。」（300～301頁）

これは第五章「品詞之小分」の解説であるが、これを見ても松下のいう「品詞」とは、①「単純ナ」もの（＝いわゆる自立語）と、②「下へ附属詞ノ付イテ居る」もの（＝いわゆる文節）との二種類があることを意味しているとわかる。この立場は『標準日本文法』『改撰標準日本文法』へと連続していくものである。

## 2 「修成品詞」の論

次に着目したいのは、『漢訳日本口語文典』で、はじめて「修成品詞」という考え方が登場したことである。「修成品詞」は次のようにして導き出される。

まず、松下博士は本書の第一章「詞之分類」において、二つの視点から「詞（コトバ）」を分類している。

(1) 詞　①単語（一つの詞…山、海、春、風）
　　②連語（二つ以上の詞の続いたもの…海山）
　　※熟語（二つの詞が熟して一つの詞になったもの…春風。熟語は連語ではなく単語）

(2) 詞　①単独品詞　品詞として独立しているもの。
　　②修成品詞　詞（＝品詞）に付属詞の付いたもの。

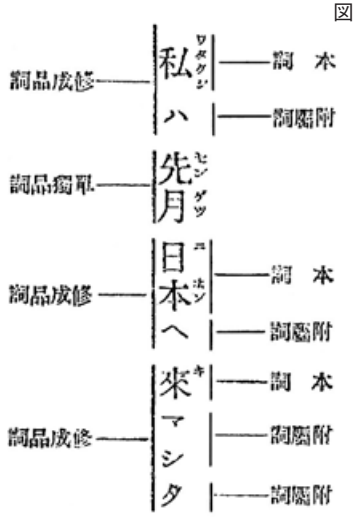
詞を二つの視点から分類して考察しようとしているが、論としてはまだ完成への途上にあると解したい。(1)は詞を構成する基本単位を「原辞」であるとした『改撰標準日本文法』の原辞論への連続性を思わせるものであり、(2)の「修成品詞」は明らかに『標準日本文法』、『改撰標準日本文法』

で展開される「詞の相関関係」、また「詞（＝文節）の論」の先駆けとなるものである。

品詞ノ独立シテ居ルノヲ単独品詞ト云ッテ付属詞ノ付イテ居ルノヲ修成品詞（シュウセイヒンシ）ト云ヒマス。修成品詞ハ本詞ト付属詞トデ出来マス。（本書27頁）

「修成品詞」はまさしく今日の学校文法でいう「文節」に当たるもので、松下の著作では本書で初めて登場する用語である。「単独品詞」と「修成品詞」について、第1図（左掲）のように図解して説明する。

第1図




（『漢訳日本口語文典』28ページ）

図の中での修成品詞「私ハ」「日本へ」「来マシタ」のそれぞれが本詞＋付属詞の形から成り立って、一つの文（章句）を構成していることを中国からの留学生に理解させるために、この図の下に松下は 我 下月 来 日本 と、対応する漢訳を付している。

このほかに「修成品詞」を示すものは次の2例である。

・此レハ　私ノ　友達デ　御座イマス

此レ（本詞）ハ（付属詞）＝修成品詞

私（ワタクシ）（本詞）ノ（付属詞）＝修成品詞

友達（本詞）デ（付属詞）＝修成品詞

御座イ（本詞）マス（付属詞）＝修成品詞

・病気ハ　マウ　スッカリ　直リマシタ

病気（本詞）ハ（付属詞）＝修成品詞

マウ＝単独品詞　　スッカリ＝単独品詞

直リ（本詞）マシ（付属詞）タ（付属詞）＝修成品詞

（本書28～29頁）

## 3 『漢訳日語階梯』

この「修成品詞」論に至る前段階の思考過程を示すものとして、松下大三郎著『漢訳日語階梯』（一九〇六年・明

治三九）で用いた「成語図式」がある。

弘文学院教授、法政大学講師松下大三郎著『漢訳日語階梯』（誠之堂書房刊）は、『漢訳日本口語文典』刊行の前年に中国人留学生の日本語教科書として出版された。本稿執筆のために参照した國學院大學図書館蔵の初版本はかつて三矢重松博士が所蔵され、三矢夏井氏からの御寄贈によるものである。（なお徳田先生による翻刻版『漢訳日本口語文典』の底本も、もと三矢博士が所蔵され寄贈されて國學院大學図書館が所蔵する初版本である。ついでに云えば国会図書館蔵本の『漢訳日本口語文典』の表紙見返しには松下博士の生涯の友であった國學院大學教授高橋龍雄への献辞が松下の自筆で記されている。）

『漢訳日語階梯』はA5版大・本文208頁。表紙に続いて例言、（目次も無くて）すぐに日本語の五十音、静濁音などの解説の後に、品詞と文型の説明、それを受けてパターン・プラクティスを思わせる数多くの練習問題が用意されている内容構成から見ると、〝日本語学習帳〟の目的を意図して編集された書なのかもしれない。

本書の「例言」（凡例）に、「此書示語之構造以成語図式」（この書は語の構造を成語図式を以って示す）とあるのを受けて、日本語文の構造を図解して中国人留学生に示しているのが特色である。

第2図

主語、説明語ト修飾語名詞、代名詞、動詞

□ハ□デハ アリマセンカ

□ハ□デハ アリマセン

コレハ主語、修飾語ト説明語ノ成語圖式デス。

（『漢訳日語階梯』52ページ）

右に掲げるのは「主語、説明語ト修飾語」の文型についての成語図式である。（「説明語」とは述語のこと。）

松下はさまざまな文型について成語図式を用いて説明している。□欄と各種の罫線（傍線）を用いて、学習者に□の中には名詞・代名詞を当てさせ、罫線（傍線）の箇所には動詞・形容詞などを当てさせる反復学習を課して、

日本語構文の学習を進めた。成語図式に示す文の成分が文節に相当する単位で区切られていることに注意したい。

（その他の成語図式）

並列語の成語図式　教師ト学生

修飾語の成語図式　牛込ノ神楽坂

遠イ国　綺麗ナ着物

主語と説明語の成語図式　私ハ学生デス。

村松サンガ来マス。

主語、説明語と修飾語の成語図式

私ハ日本人デハアリマセン。

客語の成語図式　私ハ東京ニ居マス。

『漢訳日語階梯』は語法の解説と練習問題に重点を置く日本語学習書で、日本語構文の仕組みを「成語図式」を用いて視覚的に説明しているのが特色と言える。「成語図式」は文の成分を説明することを基本とするものであるから、この着眼が同時的に『漢訳日本口語文典』での「修成品詞」に連なっていることは容易に想像できる。そしてこの「成語図式」「修成品詞」が後の『標準日本文法』での「詞の相関論」への下地となっているのである。

なお、「成語図式」の考え方は、日本口語文典の嚆矢として高く評価される『日本俗語文典』（一九〇一年・明治三四年刊）で、章句の成分と成分との相互関係を説いた内容を敷衍し、図式化したものであると考えられる。（松下大三郎著『日本俗語文典』第二編・句法論・第一章「成分の種類」を参照）

## 4　日本語の特質を説く『漢訳日本口語文典』

本書の第一章「詞之分類」で、詞（コトバ）を名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接続詞・感嘆詞に分類した後、第八節の「附属詞（助詞、頭尾語）」では松下独自の「附属詞」観が展開される。

附属詞ハ独立シテハ意味ノ無イ声音デ、品詞ニ副ッテ品詞ノ意味ヲ助ケル者デス。（本書23頁）

附属詞ハ品詞ヘ付ケテ其ノ意味ヲ助ケル為ノ声音デス。自分ガ一ツノ詞（コトバ）ナノデハアリマセン。品詞ト一緒ニナッテ両方デ一つの詞（コトバ）ヲ構成スルノデス。（本書26頁）

附属詞についての解説は、第二章「助詞之意義」（静助詞・動助詞）と第四章「頭尾語之意義」とが当てられているが、松下文法論が形成されてゆく過程の論として特に注目すべきは第四章である。

附属詞ノ中デ助詞ヲ取ッテ其ノ残リヲ頭尾語ト云ヒマス。頭尾語ノ中デ品詞ノ前ニ置クノヲ接頭語と云ッテ品詞ノ次ニ置クノヲ接尾語ト云ヒマス。

日本語ハ附属詞ガ非常ニ沢山有リマス。其ノ使ヒ方ハ緻密ナ者デキチントシタ規則ガ有リマス。若し其ノ使ヒ方ヲ間違ヘレバ訳ガワカラナクナリマス。漢文ハ本簡潔ヲ尊ブ者デスカラ余リ附属詞ヲ使ヒマセン。支那人が日本語ヲ使フ時ハ附属詞ニ慣レマセンカラ時々使ヒ方ヲ間違ヘマス。ヨク注意シナケレバナリマセン。

（本書30～32頁）

(1)　接尾語についての精密な考察

第四章「頭尾語之意義」には86頁を割いて、松下独特の鋭い日本語解釈が展開されている。松下博士は常に日本語文法の品詞論では扱いにくい諸問題に積極的に取り組み、そこから独自の学説を展開されるのだが、本書「頭尾語の意義」の章においても新しい発掘を試みていることが数多く見受けられるのである。

まず「頭尾語之意義」の章で記述されている項目を整理すると次のように分類出来る。

①　御（オ）、御（ゴ）／不（フ）、無（ム）／サン、様（サマ）、君（クン）／共（ドモ）、方（ガタ）、達（タチ）

②　ナゾ、ナンゾ／サ（分量・度合い）／計（バカ）リ、余（アマ）リ、近（チカ）ク、足（タ）ラズ、ダケ／ヅツ／程、位／時分（ジブン）、頃（コロ）、過（スギ）、前（マヘ）／アタリ（辺り）／カラ、マデ／ナガラ、ツツ、ガテラ／ニ（為ニ）／中（チュウ）／中（ヂュウ）／中（ウチ）、間（アヒダ）／時（トキ）、場合（バアヒ）／度（タビ）ニ、タンビニ／ノデ、ンデ／ノニ／癖（クセ）ニ／所デ、所ガ／モノ、モン／コト／ノ、ン／訳、筈／可（ベ）キ／方（ホウ）／積（ツモ）リ／為（タメ）／所（トコロ）／ドコロ（所）／ママ（儘）／次第（シダイ）／通（トホ）リ／様（ヨウ）／サウ／ラシイ／タイ／善（イ）イ、憎（ニク）イ／ガル

松下は①を「接頭語」、②を「接尾語」としてその用法を説く。ここで注目したいのは、②には副助詞の類が幾つか含まれていることである。「計リ、ダケ」「カラ、マデ」などは本書の第二章「助詞之意義」第三類静助詞で取り上げた「バカリ、ダケ」「マデ」と項目として重なっている。

「バカリ、ダケ」における助詞と接尾語の違いを松下は以下のように説明している。

・接尾語「計リ、余リ、近ク、足ラズ、ダケ之意義」の項の解説では、

私ハ毎月四十円計リ使ヒマス。

私ハ毎月四十円ダケ使ヒマス。

十年計リ、十年ダケ、三里計リ、三里ダケナド。

計リ、余リ、近ク、足ラズ、ダケハミンナ数詞ヘ付けて名詞や副詞ヲ拵ヘマス。数詞ハ数量ガ確デナケレバ計リヲ付ケ、…及ンデ過ギナケレバダケヲ付ケマス。

**ダケ**ハ数詞ヘ付クバカリデハアリマセン。分量ヲ表ハス詞ヘハミンナ付キマス。

私ハ食ベラレルダケハ食ベマシタ。

私ハ云ヒタイダケノ事ハ云ヒマス。

英国は英国**ダケ**ノ事ハアリマス。

右の例ノ　　ヲ付けケタ詞ハミンナ其ノ分量ヲ表ハシマス。ソレダカラ**ダケ**ガ付クノデス。

注意、**バカリ**、**ダケ**ハ第八十四頁（静助詞）の**バカリ**、**ダケ**トハ使ヒ方ガ違ヒマス。一緒ニシテハイケマセン。

・「静助詞之意義」で説く「**バカリ**、**ダケ**之意義」は、

**バカリ**ハ唯ト云フ字ノ意味デス。特ニ抜キ出シテ云フノデス。

私ハ毎日日本語**バカリ**練習シテ居マス。

アノ人ハ何時デモ洋服**バカリ**着テ居マス。

**ダケ**ハ独や唯ナドノ意味デス。沢山の中カラ一ツヲ取ッテ他ヲ捨ルノデス。

一年ノ中デ二月**ダケ**二十八日デ後ハミンナ卅日、卅一日有リマス。

これらの解説からして、松下は静助詞の「ばかり、だけ」がになう構文的役割に較べると、接尾語「ばかり、だけ」のになう機能を限定的なものであると考えて、両者の区別をしているように思われる。一つの辞について助辞と接辭の二つの側面から分析しようとしていることがわかり、注目すべきである。

### (2)　形式語論の萌芽

接尾語として挙げられている中に、いわゆる形式的な意味を持つ語が多く含まれていることに気付く。「間、時、

場合、モノ、モン、事、ノ、訳、筈、方、為、所、侭、次第、通り」など、本書では接尾語として扱っているものが、やがて『改撰標準日本文法』では卓越した形式名詞論として展開されていくのだが、その下地がここに豊富に示されている。例えば「**モノ、モン**之意義」、

モノ、モン（音便）ハ本名詞デ物ノ意味です。其カラ転ジテ接尾語ニナッタノデス。

一、奉公ハ辛イ**モノ・モン**デス。（様子を指す辞）

二、朝ハ早ク起キル**モノ・モン**デス。（可宜などの意味を付け加える）

三、悪イ事ハ知レル**モノ・モン**デス。（者、所などの意味へ當ト云う字の意味を加える）

などの例文を挙げて、もとは名詞であった「モノ」が転じて接尾語となったときのはたらき方・ニュアンスなどについて説明している。（本書252～254頁）

「**所デ、所ガ**之意義」の項は、松下が触れることは少なかった、文の連接観を垣間見せて面白い。「上文ニ逆ッテ下文ヲ起ス」と松下にしては珍しい言い方をしている。

「（所デ、所ガ）ハ孰レモタッテ（静助詞）ト同じデス。縦令ノ意味デス。マダ無イ事ヲ仮設シ上文ニ逆ッテ下文ヲ起ス辞デス。タノ下ヘ付ケテ副詞ヲ造リマス。入院シタ**所ガ・所デ**此ノ病気ハ二月ヤ三月デハ直リマセン。

日曜デ無ケレバ尋ネ**タッテ**逢フコトガ出来マセン。

その他、準体助詞「ノ」なども「頭尾語」の中に収められていて、品詞論では処理しにくい造語成分・連語の様相と問題点を、この「頭尾語之意義」の章で果敢に取り上げて解明し、その内容の大部分を『標準日本文法』へと連続させていることを特記したい。第四章「頭尾語之意義」には此のほかにも松下の独創性が発揮された条項が多数あることを記しておく。

ともかくも『漢訳日本口語文典』全400頁のうち、「助詞之意義」に96頁「頭尾語之意義」に86頁を割いて、その結果「品詞ニ副ッテ品詞ノ意味ヲ助ケル」附属詞の解説に計182頁、一書全体の44・5％を割いていることは、日本語文典また日本語教育において松下博士が如何に助詞・助動詞と接辭（特に接尾語）を重視していたかを物語っている。

(3)「詞の相」の論の出発点となる

中国人留学生のための日本語教科書ではあったが、『漢訳日本口語文典』は松下の日本語文法論の先見性を存分に注ぎ込んで、後の名著『標準日本文法』への布石としての役割を十二分に果たした書である。

やがて『標準日本文法』『改撰標準日本文法』へと引き継がれていく、『漢訳日本口語文典』での注目すべき記述事項を以下に箇条書きで記してみる。

・名詞を有形名詞と無形名詞に分けている。→無形名詞は、やがて「形式名詞」論に展開する。

・動詞の相を、平常語、対者敬語（鄭重語）、行動者敬語、関係者敬語に区別し、『日本俗語文典』での敬語論を本書で整理している。→『標準日本文法』で動詞の相の論へと展開していく。

・動詞を分けて、自立動詞と補助動詞とした。補助動詞の例、「鳴いて居る・植えて有る・乗って遣る・行って見る」などを詳説。→『標準日本文法』の動詞論へ。

・無活用動詞の存在を説く。漢語＋スル→『標準日本文法』無活用動詞の論へ。

・準形容詞（副体詞）を説く。「名詞ノ上ニ在ツテ其ノ意味ヲ修飾シマス。併シ、唯修飾スルバカリデ、少シモ説述シマセン。是レガ本当ノ形容詞ト違フ点デス」―此の本・或るひとが・飛んだ災難・大した金持。→『標準日本文法』へ。

・関係副詞（後置詞）を説く。「体詞ヲ用詞ヘ連ネテ関係ヲ表ハス」―東京に**於いて**万国博覧会を開きます・私に**取って**恩人で御座います・親と**為て**子を可愛く思わない者はありません。→『標準日本文法』へ。

以上に記したように、頭尾語のはたらきをも含めて日本語が持つ機能を品詞ごとに考察し、説いていることが『漢訳日本口語文典』の最大の特色である。

なお、文中における「詞ノ格（コトバ）」を考察した本書の第六章「詞之職任」は、主格・賓客・領格・独立格を説いてはいるが、これらは内容的に前著『日本俗語文典』での「第二編　句法論」を整理したものに過ぎず、松下博士の本格的な詞の相関論の形成は後の『標準漢文法』（一九二七年・昭和二年刊）での記述を待つことになる。

## 三　松下文法論と『漢訳日本口語文典』

松下博士は『漢訳日本口語文典』において柔軟にまた鋭く日本語を見つめ、日本語の仕組みと特質とを示す豊富な材料と解説を著したが、それらはそのまま名著『標準日本文法』の「詞の相」の論、すなわち詞の機能・はたらきを考察した「詞の相」の論へと連続しているのである。松下日本文法論が形成される主要な出発点の一つであったのが本書『漢訳日本口語文典』であったと私は思う。

「詞の相」の論と「詞の格」の論は松下文法論を支える二つの骨格である。文における文節相互の関係を考察した松下「詞の格」の論は、『日本俗語文典』の句法論から出発し、『標準漢文法』で「詞の相関論」のフレームワークを確定し、それを『改撰標準日本文法』で結晶させた。松下博士は常に中国語、漢文への関与を貴重なる踏み台として日本語文法論を構築されたということを、この『漢訳日本口語文典』を読み返しながら深く思ったのである。なお本稿は松下文法論が形成される過程における『漢訳日本口語文典』の位置付けを考察したものである。日本語教育史上においても本書が高く評価されていることについては関正昭著『日本語教育史序説』を参照されたい。

＊　＊

本学の諸星美智直教授に随って徳田政信先生を静岡市葵区の御自宅にお訪ねしたのは平成十六年（二〇〇四）七月二十八日であった。日本語文法研究書大成『漢訳日本口語文典』が完成して間もないころの夏の日、長時間にわたって国語学研究への情熱、松下大三郎博士との出逢いの日のことなど、夕刻になっても尽きることのなかった先生のお話しぶりが懐かしく思い起こされる（お許しを得て此の時のお話をテープに記録させていただいたのであった）。徳田先生は昨年十二月三十日に九十八歳で逝去された。松下文法論構築への本格的な出発点となる『漢訳日本口語文典』の復刻までの御労苦と、「松下説に関する主要著作のほとんどを、世に出すことができた」という徳田先生の言葉の重みが、今改めて思い返されるのである。

（平成二十五年十一月記）

鈴木一氏の右の論稿は、平成二十四年十二月に逝去された徳田政信氏が、長きに亙り本会の運営に寄与してこられたことに因み、本号に哀悼の意を込めることとし、徳田氏に研究上の所縁のある鈴木氏にご執筆を要請したことに応えられたものである。

ご応諾くださった鈴木氏にお礼申しあげる。

編集委員会